



声こゑノ 音おとノ ドケモノ

声の広報 届け続けて20年

「い つもお世話になってます。朗読サークル『ひばり』の松田です。今日、新しい広報3部、取りに伺いますので、よろしく願いします。」

毎月、新しい広報が出来上がるとすぐ、朗読サークル『ひばり』さんから秘書広報課に電話がかかってくる。職場に異動したばかりの頃は、どんな活動をしているサークルなのかとても疑問だった。広報が印刷会社から届く日を、間違いないか知っているんじゃないかと思うくらい早く広報を受け取りに来る。職場の先輩に聞いてみると、「広報にはほんまつ」を音訳し、視覚障がいがある方へ、カセットテー

プやCDにして配っているサークルだと聞いた。

毎月、30ページ前後ある広報紙を、本文はもちろん、広告欄、掲載されている写真の様子、説明で使っている円グラフまで、すべて言葉にし、声にして伝えている。

声の広報を届け続けて20年。「今年で21年目を迎えるけど、長かったようで、あつという間だったかな。」と笑って話す朗読サークル『ひばり』代表の松田さん。今回は、朗読サークル『ひばり』さんの活動を追いながら、障がいがある人もそうでない人も、共に生きる社会を考える。



朗読サークル『ひばり』定例会の様子
会員同士の何げない話から定例会がはじまる

『ひばり』のお仕事

ひ ばりのように、いつまでもきれいな声で情報を届けたいという思いから、朗読サークル『ひばり』の名前は付いた。会員数は現在12人。実際に音訳を利用して

いる方は10人ほど。「広報にほんまつ」の他にも新聞のコラム欄、希望があれば、電車の時刻表や、家電の取り扱い説明書なども音訳することがあるという。昔はカセットテープレコーダーで、ここ数

月 年は、パソコンに声を吹き込み、CDにして届けている。月に2回開催する定例会。取材に伺った日は、複

式呼吸の練習をしていた。活舌よく声を出すには、練習は欠かせないが、実践することで学ぶことのほうが多いという。音訳は当番制で、年に2〜3回ほど回ってくる。録音は、会員の自宅で行うことがほとんどだそう。

は、会員の自宅で行うことがほとんどだそうだ。

読むだけじゃない 伝えることの難しさ

皆 さんの活動を始めたきっかけはそれぞれだが、ほぼ共通しているのは、音訳に興味があったということ。実際やってみると、音訳

はない、伝えることの難しさを感じていると話す。「どう読んだら伝わるのか。日々、勉強させられることの連続です」と皆、口にする。

は奥が深く、ただ読むだけでは

は、会員の自宅で行うことがほとんどだそうだ。

私たちの声を 待っている人がいる

広報には、これからの情報が
たくさん詰まっている
だからこそ、今、必要な情報を
少しでも早く届けたい



広報にほんまつ8月号を録音する吉田さん。
「アクセントが二本松版になることもあるん
です。広報だから許してもらってます(笑)。」
人のぬくもりが伝わる「声の広報」だ。

広 報の音訳は、会員2人
で分担している。30

ページ前後ある広報紙をCD
にすると、2〜3時間となる。
しかし収録する前には下読み
をし、読み間違えがあれば、
ストップさせ、またやり直し。
実際に聞いてみてまたとり直
すこともあるため、収録に掛
かる時間は録音されている時
間の倍以上。雑音が入らない
ように、そして仕事や家事の
合間を縫っての作業となるた
め、録音する時間を作ること
が大変だという。

少 しでも早く、利用者の
皆さんに「声の広報」

を届けたいという思いから、
広報が出来上がるとすぐ、市
役所に取りに来る。広報を音
訳する際は、地名や名前の読
み間違いをしないようにし、写
真を説明する際は、様子が思
い浮かぶようにするなど、細
かい気遣いがあることが取材
中の会話からも伝わってくる。

interview

私たちにしか 届けられないという思い



朗読サークル『ひばり』代表
松田知子さん

読 むことは誰にでもでき
ること。音訳は、誰で

もできる仕事のように見えま
すが、ただ字面を追っている
だけでは伝わりません。聞い
ている方が分かるように読む
には、読み手が文章を正しく
理解し、文字情報を音にする
技術が必要です。広報は地元
の情報、だからこそ地元のグ
ループである私たちが音訳を
しないと(笑)。一人でも聞い
てみたいと思う人がいれば、
喜んで音訳を引き受けますよ。

読む人の声から その人の感情が伝わる



声の広報を利用する
渡邊孝松さんと
妻・あい子さん

2、3年前までは、白い色だけ見えていた孝松さんのために、庭に白い色の花を植えた妻・あい子さん。取材に伺ったときは、白いキキョウが咲いていた。素敵な夫婦の形がそこにある。

毎

朝、欠かすことのない夫婦の散歩。ほとんど

目が見えなくなった、夫・孝松さんの白杖を2人で持ちながら散歩する。「電車ごっこしてるみだいなんだあ。」と笑って話す孝松さん。妻

のあい子さんも一緒に笑う。網膜色素変性症もうまくしきそへんせいししょうと分かったのは、20年ほど前の交通事故のとき。横から来ている車に全く気付かず事故を起こした。病院へ行って初めて目の病気だと分かった。網膜色素変性症は、徐々に視野が狭くなり、視力を失うことがある遺伝性の病気だ。

郵

送で送られてくる朗読サークル『ひばり』からのCD。「届く日が近くなると、『まだ来ない、まだ来ない』って待つてるんですよ。」と妻のあい子さん。届くとすぐに聴いているという。「声の広報」を聴き始めてから10

年以上になる。だから、朗読サークル『ひばり』の音訳がすぐ上手になったことも分かるそう。そして、聴こえてくる声から読んでいる人の気持ちまで分かる、だんだん疲れて来てるな…そしていつも

思う、読むの大変だろうなと。

視

力を失った今、同じ視覚障がいを持つ人との交流会が楽しみだという。視覚障がい者は、なかなか外出することができないからだ。朗読サークル『ひばり』が年1回、交流会を開催している。ひばり会員と利用者などが集まり、お互いに話ができる唯一の場だ。孝松さんはいう、「こういう交流会があるというところ、声の広報を届けてもらえるということ、同じ病気を持つ人が二本松にもいるんだということ、同じ視覚障がいを持つ人に知ってもらい、心の視野も広げてほしい。」

誰もが暮らしやすい 二本松市へ

昨 年施行された「障害者差別解消法」では、障がいがある方々への配慮を、これまで以上に行うよう求められており、市としても市職員への対応の指針を定めて、各部署において十分な配慮ができるよう努めています。また、こうした考え方を規範とし、市ではさまざまな障がいがある方々に向けた福祉サービスの提供や、日常の相談対応等を行っています。



二本松市福祉部
福祉課 市川博夫課長



公共機関や病院など窓口での筆談対応表示を市内で進めている

視 覚や聴覚に障がいがあり、情報の取得や意思疎通が困難な方々への事業としては、今回ご紹介した『ひばり』さんのような視覚障がい者の支援団体や、聴覚障がい者向けの手話通訳者の活動などをサポートしています。障がいの有無に関わらず、誰もが暮らしやすく、豊かな生活を送ることのできるまちを目指していきたいと思っております。そのためにも、障がい福祉に関する各種施策の実施にあたっては、今後も一人一人に寄り添った対応に努めていかなければならないと考えています。

“声のお便り”として、朗読サークル『ひばり』の会員がそれぞれ自分の好きな話を録音して利用者に配った。

朗読サークル『ひばり』が開催する交流会での話。^{けんしょうえん} 腱鞘炎になった話をした会員に、利用者が「腱鞘炎治った？」と声をかけた。声を聴いただけで自分だと分かってくれたことに驚いた。そして自分の声がちゃんと届いていたことが何よりうれしかったという。

人は、人と話をする事で理解し合える。

でも、障害について知らない、どう関わっていいのか分からず避けてしまうことがある。障がいがある人もそうでない人も共に生きる社会づくりの第一歩は、皆さんの中に、心のバリアフリーを築くことから始まるのかもしれない。

声が届いて
つながって
支えあう